

## 深川江戸資料館レファレンス②

## 江戸のお金について

江東区深川江戸資料館



江戸時代の貨幣：左から慶長小判、慶長丁銀、慶長豆板銀、宝永通宝銅十文銭（日本銀行貨幣博物館蔵）  
※実物大ではありません

「宵越しの銭は持たない」とは、江戸で生まれ育った人は収入をその日のうちに使い果たす気風をいいます。実際、江戸時代の人々の生活費はいくらだったのでしょうか。今号は江戸時代のお金について調べてみました。見学の補足になれば幸いです。

## 1. 江戸時代の貨幣制度について

慶長六年（1601）、徳川家康は貨幣制度を統一するため、大きさや重さ、金銀の含有率、製造の技術・体制を整備し、金銀貨（慶長金銀）の発行を命じます。その後、寛永十三年（1636）に徳川家光が銅銭（寛永通宝）の発行を命じ、金貨・銀貨・銭貨（銅銭）による三貨制度が完成しました。ほかにも各藩の大名が発行した紙幣「藩札」など江戸時代には複数の通貨が存在しました。貨幣ごとに単位が異なるなど、現在と比べると江戸時代の貨幣制度は複雑です。

### ■江戸時代の貨幣の単位

金貨の単位：両・分・朱

銀貨の単位：貫・匁・分・厘・毛

銭貨の単位：貫・文

金貨は計数貨幣として小判一枚を一両でかぞえ、銀貨は秤量貨幣として重さをはかって使用します。「関東の金遣い」「上方（大坂）の銀遣い」といわれたように、江戸では金貨を、京や大坂では銀貨を商売の

取引で使用しました。一方、庶民は銭貨を日常的に使用しました。庶民にとって金貨は「十両盗むと首が飛ぶ（死罪）」とされるほど大金で、日常生活において、小判を使うことはめったになかったのでしょうか。

## 2. 江戸時代の米と金の関係について

江戸時代は米も通貨と同等の価値を持ち、領主は税である年貢を米で徴収し、武士の給料も米で支払われました。備蓄や食べる分以外の米は換金するため、大坂や江戸の市場に送ります。展示室のモデルである深川佐賀町界隈は米の集散地のひとつとして、穀物問屋の集積度は江戸随一でした。

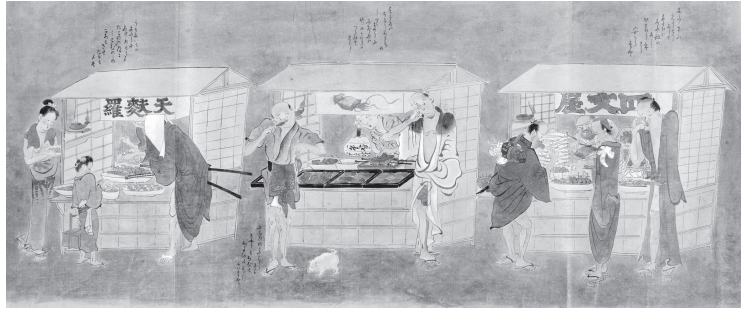
展示室に再現した<sup>つきごめや</sup>春米屋は米問屋から米を仕入れて店頭で販売します。換金のために売却した米を末端業者である春米屋へ卸したことで、江戸庶民も白飯を食べることができました。



常設展示室 春米屋「上総屋」

### 3. 江戸時代の物価について

江戸時代の貨幣は社会の仕組みや暮らしの変化などにより、交換比率は年代ごとに大きく変動していました。



江戸時代の屋台の様子（職人畫繪詞（国立国会図書館蔵））

#### ■三貨の交換比率

江戸前期の交換比率：金1両＝銀50匁＝銭4,000文  
江戸中期の交換比率：金1両＝銀60匁＝銭4,000文  
江戸後期の交換比率：金1両＝銀60匁＝銭6,500文

りしています。現代と同様に、江戸時代も物価高騰で値上げをした食品があるようです。

#### ■物価一覧

かけ蕎麦	16文（約480円）
稲荷鮓	ひと切れ4文（約120円）
天ぷら	一串4文（約120円）
団子	一本4文（約120円）
水茶屋のお茶	一杯6文（約180円）
冷や水	一杯4文（約120円）
米	一升四合100文（約3,000円）
大根	一本7文（約210円）
アサリ	一升12文（約360円）
シジミ	一升6文（約180円）
卵	1個20文（約600円）
紅（口紅）	32文（約960円）
古着	一着100文（約3,000円）
寄席の木戸銭	16文～20文（約480～840円）
虫売り	一匹8文（約240円）
浮世絵	16文（約480円）
瓦版	4文（約120円）
手習いの月謝	100～200文（約3,000～6,000円）
長屋の家賃	300～500文（約9,000～15,000円）

※江戸時代で比較的物価が安定していた文化・文政時代（江戸中期）と『江戸のお勘定』、『江戸の銭勘定』を参考に、1文を約30円として換算しました。

展示室に関係のある物価をまとめてみました。

一覧をみると四の倍数が多いと思ったのではないのでしょうか。明和五年（1768）に銭貨の四文銭しもんせんが発行されたことで、多くのものが四の倍数の値段になりました。右上の図に描かれた四文均一の食べ物屋台「四文屋」などは細かな計算が要らず、安くて手軽なことから繁盛しました。

また『江戸物価事典』によると、幕末まで16文だった蕎麦が物価高騰で24文（約720円）まで値上が

### 4. 与太郎はいくら損をしたのか

以上の話を踏まえて、古典落語「時そば」に出てくるお金を換算してみます。

ある冬の夜、蕎麦屋台で食事を終えた男は支払うために銭貨を1枚ずつかぞえ、8枚目をかぞえたところで、「今、何時だなんどき」と店主に時刻を尋ねます。店主が「ちょうど九つ」と答えると男は10枚目からかぞえ始め、代金を1文誤魔化します。

それを見ていた与太郎はその手口を真似ようと、銭貨を8枚目をかぞえて時刻を聞くと、「四つ」と店主が答えたことで、5枚目からかぞえ直してしまい、勘定を余計に取られたという噺です。この噺は江戸時代の時間に関係しています。「九つ」は深夜0時のことで、「四つ」は22時です。ドジな与太郎は男より2時間も早く実行して失敗したのです。

さて、「時そば」にでてくる金額ですが、蕎麦一杯16文に男は1文ごまかしているのに、15文しか支払っていません。対して、与太郎はもう一度、5枚目からかぞえたことで合計20文（約600円）も支払ってしまいました。つまり4文も損したことになります。4文あれば稲荷鮓も天ぷらも団子も食べることができます。そう考えると、与太郎はもったいないことをしたと思えるのではないのでしょうか。

#### 今号の参考文献

- 『深川江戸資料館 和文解説書』（江東区深川江戸資料館）
- 『江戸物価事典』展望社
- 『読んで味わう古典落語の傑作101噺』（自由国民社）
- 『江戸のお勘定』（大石学監修・MdN新書）
- 『江戸の銭勘定』（山本博文監修・洋泉社）